

P3-248 悪性黒色腫への悪性転化を伴う卵巣成熟嚢胞奇形腫の一例

県立広島病院

坂手慎太郎, 占部 智, 原 香織, 中島祐美子, 頼 英美, 吉本真奈美, 藤東淳也, 伊達健二郎, 上田克憲, 内藤博之, 占部 武

卵巣成熟嚢胞奇形腫の悪性転化症例の大部分は扁平上皮癌で、その他腺癌や肉腫、悪性黒色腫の報告があるが比較的稀である。今回、悪性黒色腫への悪性転化を伴った成熟嚢胞性奇形腫の1例を経験したので報告する。症例は80歳、2経妊2経産。60歳時に口腔内の悪性黒色腫切除の既往がある。痴呆の既往があり、安定剤の誤用後に意識障害を来し近医へ搬送。CTにて骨盤内腫瘍を指摘され、当科へ紹介となった。超音波、CT上は一部に充実成分を伴い、脂肪成分、浮遊物を含む12cm大の嚢胞性腫瘍を認めた。血液検査ではCA19-9;184U/ml, SCC;4.1ng/ml, CA125;44U/mlと上昇を認めた。成熟嚢胞性奇形腫の悪性転化が疑われ、開腹手術を施行した。左卵巣は小児頭大に腫大し、腹水は認められた。両側付属器切除術を施行し、迅速病理検査にて悪性黒色腫を伴う成熟嚢胞性奇形腫と診断された。病理学的には大部分の成熟奇形腫所見のほか、部分的に隆起性、結節性の黒色斑状巣を認め、核分裂像を多数認める異型 melanocytic cell の増生を認めた。これらは免疫染色でS100蛋白陽性、HMB-45陽性、p53陽性であった。腫瘍組織は奇形腫内に広範に進展し、他臓器に原発巣と考えられる病変が認められないことから、奇形腫を基盤として発生した悪性黒色腫とみなされた。悪性黒色腫への悪性転化を伴う成熟嚢胞奇形腫1a期(pT1apNXM0)と診断した。高齢であり、追加治療を希望されなかったため、現在外来にて経過観察中であるが、再発兆候を認めていない。

P3-249 成熟嚢胞性奇形腫が晩発性再発・悪性転化した卵巣甲状腺腫の1例

西神戸医療センター

尾崎友美, 上田智弘, 齋田有紀, 近田恵里, 梅本裕美子, 川北かおり, 竹内康人, 片山和明

【緒言】成熟嚢胞性奇形腫は比較的頻度の高い良性腫瘍であり、卵巣甲状腺腫を合併することも多い。成熟嚢胞性奇形腫が術中破綻し、摘出後23年で腹腔内に再発し卵巣甲状腺腫に悪性転化したと考えられる1症例を経験したので報告する。【症例】49歳の5回経妊・3回経産婦で26歳時に右卵巣成熟嚢胞性奇形腫に対し右卵巣切除術が行われていた。約4年前からの下腹部腫瘤感、過多月経を主訴に当科を受診した。術前MRIでは粘膜下筋腫のほか子宮後壁に連続し造影効果のある約8cm大の腫瘍を認めたが原発巣は特定困難で悪性腫瘍の可能性も考慮し試験開腹とした。開腹時、血管豊富で奇異な大小の腫瘍が腹腔内全体に播種固着し、術中迅速病理標本で甲状腺腫との診断で、腹式単純子宮全摘・左付属器切除・大網切除術と骨盤内腫瘍の可及的切除を行い一期的手術を終了した。永久標本では甲状腺癌(濾胞腺癌)であり、子宮や摘出後であった右卵巣周囲原発の悪性所見はなく、左卵巣も正常所見であった。23年前の右卵巣摘出標本を再検討すると卵巣甲状腺腫を伴う成熟嚢胞性奇形腫であった。術後全身MRI再検、PET-CT、血管造影検査等を行ったところ、後腹膜・横隔膜直下など腫瘍が多発残存していた。頸部甲状腺検査は正常所見であった。腫瘍減量手術のため二期的開腹手術を行い、さらにアイソトープ治療を行った。【結語】本症例は成熟嚢胞性奇形腫に合併した卵巣甲状腺腫が晩発性再発・悪性転化を来した稀な病態であると考えられた。卵巣甲状腺腫瘍の臨床的・組織学的悪性度の診断、治療法の選択は慎重を期する必要があると考えられた。

P3-250 卵巣未熟奇形腫におけるOCT4の発現

京都大

安彦 郁, 万代昌紀, 濱西潤三, 松村謙臣, 馬場 長, 山村省吾, 姜 賢淑, 岡本尊子, 小西郁生

【目的】未熟奇形腫は卵巣癌の1%を占めるまれな腫瘍である。未熟な神経上皮成分の量が重要な予後因子であり、これに基づいてGrade(以下G)1-3に分類されるが、その生物学的な意義はわかっていない。今回、原始生殖細胞や胚性幹細胞に発現している転写因子であり細胞の全能性の維持に必須とされるOCT4や、神経細胞への分化を誘導するPAX6の発現を未熟奇形腫において解析し、未熟神経上皮成分の詳細な分化度とその意義を検討した。【方法】当施設の倫理委員会の承認を得て、当科で手術を行った11例の卵巣原発の未熟奇形腫(G1:2例, G2:4例, G3:5例)についてOCT4, PAX6および神経細胞のマーカーであるCD56の免疫組織学的検討を行った。【成績】OCT4はG3では5例すべて、G2では4例中2例の未熟な神経上皮成分において発現が認められたが、G1の2例では発現していなかった。OCT4陽性症例ではOCT4陽性の神経上皮のロゼットと隣接してPAX6陽性のロゼットが存在していた。CD56は成熟神経成分と一部の未熟神経成分において陽性であったが、OCT4陽性の細胞では陰性であった。【結論】OCT4は高グレードの未熟奇形腫の未熟神経上皮の一部にのみ発現しており、PAX6, CD56の発現様式とも考え合わせると、病理学的に「未熟な神経上皮成分」と診断される組織中にも、実際にはさまざまな分化段階の細胞が含まれていると考えられた。OCT4の発現は細胞の全能性の維持に必須であることから未熟神経上皮の多分化能を反映していると考えられる。すなわちOCT4の免疫染色により、高グレードの未熟奇形腫にのみ存在する、より未熟な神経成分を鑑別することが可能であり、未熟奇形腫の悪性度の診断に有用であると考えられた。